

中島敦の漢詩

——〈家学〉の衰頹と〈不遇意識〉のかたち——

橋 本 正 志

はじめに

中島敦（一九〇九—一九四二）は、その短い生涯に二十五篇、総数三十七首の漢詩を残している。これらの漢詩の中には、一九四二年（昭17）二月、〈古譚〉（「山月記」「文字禍」）によって文壇に登場するまでの自己の文学的な不遇の経験を詠み込んだものがいくつもある。その多くは自嘲をともなった内容であるが、いずれにも共通して見出せる性質として、自己をとりまく社会を「俗説」の支配する環境として批判的にとらえ、あらたに「星」や「天狼」といった超俗的な希求の対象を設定するという志向を挙げることができる。

本稿では、漢詩という表現手段を通してこうした〈不遇意識〉を表現せざるを得なかった中島の境遇に着目し、その漢詩のありようを明らかにしたい。また、祖父・中島撫山（慶太郎）から伯父・斗南（端）へと至る漢学者を輩出した中島家が被った明治の

教育制度の改廢をめぐる動向の果てに、中島がいかにその〈家学〉の伝統と向き合っていたのかも視野に入れ、中島の率直な胸奥が投影された漢詩の意義について考えていきたい。

なお、本稿は漢詩の訓読・解釈などにあたつて村山吉廣、小室善弘、村田秀明の各氏をはじめとする先行研究に多くを拠つていることをあらかじめ一言つけ加えておく。

一 中国古典と中島文学における表現との関わり

中島には「和歌でない歌」との総題が付された歌集^②があり、そのうち自身の文学的遍歴を回想したものとして、その名も「遍歴」と題された五十五首からなる連作がある。一九三七年（昭和12）の晩秋に成立したこの歌稿には、古今東西の思想家、作家、画家、音楽家など五十数人の著名人が名を連ねており、次に挙げのように、中国の代表的な漢詩人を取り上げたものも多い（傍線・引用者）。

ある時は淵明が如疑はずかの天命を信ぜんとせし

ある時は李白の如く酔ひ酔ひて歌ひて世をは終らむと思ふ

ある時は王維をまねび寂として幽篁の裏にひとりあらなむ

ある時は阮籍がごと白眼に人を睨みて琴を弾ぜむ

遍歴りていづくにか行くわが魂ぞはやも三十に近しといふを

これらの歌には、陶淵明、李白、王維、阮籍といった歴代詩人の詩境をふまえた上で、はや三十歳を目前にした中島の彼ら詩人に対する憧憬が詠み込まれている。中島の中国の詩人に対する関心とは並々ならないものがあつたと推測される。

もとより、中島の中国古典と文学上の表現との関わりはこれだけにとどまらない。よく知られている通り、代表作「山月記」〔文学界〕一九四二・二の本文には、中国の故事が効果を生み出すように巧みに仕組まれた表現が数多くある。たとえば、主人公・李徴が旧友・袁修の前で「即席の詩」を朗詠した直後の風景描写、

時に、残月、光冷やかに、白露は地に滋く、樹間を渡る冷風は既に暁の近きを告げてゐた。

は素材である唐代伝奇「人虎伝」(李景亮撰)には見られず、中島のまったくの創作部分であるが、ここには「白露」といった秋の詩語が用いられているとともに、「虎嘯風生(虎嘯きて風生

ず)」「(英傑などが志を得て活躍すること。あるいは、それも時の情勢いかによること)」という故事も同時に連想させる工夫がある。

また、李徴が虎に変身し、異類の身となつて人前から姿を消していく時代、すなわち「天宝の末年」から四、五年後という作中の時間設定が、唐王朝を根底から揺るがした安祿山・史思明の乱が勃発した時期とちょうど重なっていることも興味深い。これに關して、

木の間を伝つて、何処からか、暁角が哀しげに響き始めた。

という同じく「山月記」の一文も素材「人虎伝」にはなく、中島の創意に基づいた部分であるが、中唐の詩人・李益の七言絶句「聽曉角(暁角を聴く)」では、

邊霜昨夜墮關榆 辺霜 昨夜 関榆に墮つ
吹角當城片月孤 吹角 城に當つて片月孤なり
無限塞鴻飛不度 無限の塞鴻 飛び度らず
秋風吹入小單宇 秋風吹き入る 小單宇³

と詠まれ、「暁角」が軍隊の統率に使われる角笛としても歌われていることから、あるいは「山月記」を、戦火による混乱の前触れを敏感に感じとつた李徴が異類の身となつて人間界から消え去

つていく物語、として読むことも可能である。「山月記」の成立時期が、第二次近衛文麿内閣のもとで挙国一致の戦時体制の確立をめざす「新体制運動」が推し進められていた同時代の一九四一年（昭16）三月から四月にかけてであったことを考えれば、こうした一文を太平洋戦争開戦前夜の「きな臭さ」を暗示するものとして、中島が意図して挿入したという解釈もあながち当たっていないとはいえないのではなからうか。

このように中島文学における表現は、多くが何らかの形で中国古典や時代性に関わりをもったところで成立している。このことは漢学の素養の深かった中島の文体的特徴を示すものとして、中島文学の解釈においてあらためて注目すべき点であるといえよう。

二 〈家学〉が被った時代的な制約

さて、中島家は代々「乗物師」として主に駕籠^{かご}の製造に従事する職人の家だったが、祖父・撫山が一八五八年（安政5）一月に漢学塾「演孔堂」の看板を掲げて以来、冒頭に触れたとおり、親族から多くの漢学者を輩出した。父・田人も漢文教師であったことから、中島は早くから漢学の素養に通じ、それが中国古典の世界に親しむ要因となったと考えられる。

ここで中島にとつての漢詩の意義を考えるに際して、まずは漢学という学問が明治の近代化の過程でどのような位置を占めてい

たのかについて、とくに学校教育制度の変遷と中島家の〈家学〉との関わりを中心に見ていくことにする。

一八七二年（明5）八月、前年に創設されたばかりの文部省によつて、「学制」が公布された。学制は、全国を八つの大学区に分類し、その下に中学区、さらに小学区を制定する教育行政法であり、いわゆる「国民皆学」に基づく近代化実現の最たる手だての一つとして明治新政府により施行された制度だった。

ただし、この学制の施行は、江戸の幕末から存続していた漢学塾に深刻な打撃を与えた。とくに幕藩体制以来の私塾の経営者は、全国的に同一の教育内容の普及を推し進める新政府の方針の煽りをまともに受け、塾生の減少の影響もあってしだいに経済的にも困窮の度を深めていき、多くが生き残りの道を模索せざるを得ない状況に追い込まれていったのである。

撫山も一八七三年（明6）八月、埼玉県久喜本町の自宅において私塾「^{うこん}幸魂教舎」を設立していたが、幸いにも地元の高い信頼に支えられて多くの入門者を迎えていた。ただ、実際は「詩経」「書経」「論語」といった中国古典を主体に「古事記」「日本紀」などの日本古典も含めたきわめてユニークな教育内容が、政府の推進する「国民皆教育」に基づく統一的教育内容と真つ向から対峙せざるを得ず、撫山は苦慮した結果、「私塾は文部省の学制の埒外にあるもので、これと背馳せず、むしろこれを補完する」ものであるとする苦肉の策を提言することで、政府との直接的な衝突を切り抜けていたという。つまり、学制の施行により、旧来

の漢学を主体とした私塾による教育は、「国民皆学」を推し進める政府の圧力をあからさまに受け、多くがしだいに衰頹していった時期でもあった。

しかし、その学制も経費の民間依存に加え、急激な施行による変化に対する戸惑いもあって、当の民間から厳しい反発や抵抗にあうなどさまざまな困難が生じ、一八七九年（明12）九月に廃止され、代わって「教育令」が発令された。教育令もまた、一八八六年（明19）三月から四月にかけて初代文部大臣・森有礼により制定された帝国大学令、師範学校令、小学校令、中学校令、諸学校通則などからなる「学校令」にその役割を譲ることになった。このように、学校教育制度の改廃にともなう不安定な状況はしばらくの間続くことになったのである。

こうした教育制度の変遷を受けて、中島の伯父・斗南はその遺著『斗南存藁』（文求堂書店、一九三二・一〇）の中の七言絶句「自嘲戲詠」にて、次のように詠んでいる。

我志未嘗讓古人	我材豈不若今人	閑來欲向天公問	何故生斯無用人
我志はいまだかつて古人に譲らず	我が材はあに今人にしかざらんや	閑来、天公に向ひて問はんと欲す	何の故にか、かくのごとき無用の人を生

みしやと

少し解釈を加えるならば、「もし自分がこの世に生を受けるの

がもう少し早かったなら、漢学の道に堂々と生きることができたものを。今や私のような無用者はなすすべもない。志も才能もあるのに残念だ」といったこの時代に漢学を生業にし、またそれを自らの支柱として据え置くことの難しさ、いわば漢学と主体的に関わって生きることへのためらいと、その果てに自らを「無用の人」として「天公」の前に自嘲せざるを得ない苦渋に満ちた心情が率直に詠まれている。中島が一九三三年（昭8）九月に脱稿した「斗南先生」には、この伯父に対して「自己に類似した精神の型」を見出し、「反射的反発」を試みる主人公・三造の姿が、中島の共感も込められて描かれている。後に述べるように、中島はこの伯父・斗南の〈血〉を自身も確実に受け継いでいるという運命的な〈桎梏〉に対して、自らの漢詩においても対面することになるのである。

このように、祖父・撫山に始まり、伯父・斗南に至る中島家の〈家学〉が被った時代的な制約の余波を一身に受けざるを得ない境遇の中で、中島はその〈家学〉の伝統、そして自己表現の手段としての漢詩と向き合っていかなければならなかったことを確認しておきたい。

三 漢詩の発表の場をめぐる

では、中島にとって漢詩はどのような位置を占めていたのか。村田秀明氏の分析に従えば、漢詩のほぼすべては、南洋群島バラ

オに編修書記として出立する以前の横浜市本郷在住の間、すなわち一九三六年（昭11）から一九四一年（昭16）までの五年余の期間に成立したものであるという。中島の生前に、活字として雑誌等に発表されたものは一つもない。ただ、第一高等学校時代の友人・氷上英廣氏が中島に宛てた葉書には、

漢詩は己には判断力がない、（一九三九年九月七日付）

という一文がみえ、中島が、自作の漢詩に対する批評を親しい同氏に頼んでいたことが推測される。また、郡司勝義氏は、中島の横浜高等女学校教諭時代の同僚だった安田秀文氏の言によるとした上で、中島の「同僚教師に宛てた漢詩は、昭和十年末から十一年にかけて、折々に教員室で披見されたといふ」と述べている。たしかに、当時の同僚の滋賀貞氏が中島に宛てた葉書には、

前詩平仄相違あり訂正旁二三書添申候

黒潮瀕海角山抱温泉郷冬半不知凍氤氳橘柚黄（下略）

（一九四〇年一月十一日付）

猶この際御願致したいことは、いつか私について御作詩がありましたか、あれを是非書いて御恵与下さい、御願致します、（一九四一年三月四日付）

とあり、中島が実際に勤め先の同僚と断続的に漢詩の往復をしていたことを窺わせる。

しかし、いずれのやりとりにしても、その対象となった漢詩は、以上の書簡文面から推測するに、自然風景や同僚教師を詠んだ漢詩が中心だったと思われる。そして、後述する自己の文学上の不遇をあるがままに詠んだものは、中島によって堅く閉ざされ人目に触れなかったのではなからうか。中島には、歿後筑摩書房版第一次全集の編者により「歌稿」としてまとめられた七つの歌集があり、毛筆で清書され、製本された後に親しい友人に回覧されたものもあったとの証言が残っているが、こうした和歌に比べれば、中島の漢詩の披露の場はかなり限定的であり、おそらく和歌とは異なる性格があったのではないかと考えられる。

中島の漢詩に関するまとまった資料は右の数点と、「手帳」「別帳」に分散する漢詩の初稿と断片、および「手帳」に平仄を書き記したものの、そして次に挙げる一九三六年（昭11）十一月に脱稿された「狼疾記」の一節しかない。そこでの博物教師・三造が、そのまま中島自身であるとはいえないが、先の勤務先での滋賀氏とのやりとりの様子をふまえて描いたものと思われ、参考までに引用する。後に「山月記」に用いられることになる表現もあって興味深いが、やはり漢詩そのものを見ないかぎり中島にとつて漢詩とは何であつたのかを判断するのは困難であるといわなければならない。

先週勤め先の学校で国漢の老教師が近作だといふ七言絶句を職員室の誰彼に朗読して聞かせてゐた時、父祖伝来の儒家に育つた自分が冗談半分その韻をふんで咄嗟に酬いて見せた。

その巧拙よりも、方面違ひの若い博物教師がそんな事をして見せたものだから、老先生はすつかり驚いて、人の良ささうな大袈裟な身振で讀め上げて呉れたのだが、全く、その時、自分は——尊大なるべき俺の自尊心は——何と卑小な喜びにくすぐられたことだらう！ 実際、其の老教師が讀めた言葉の一句一句をさへハツキリ記憶してゐる程、喜ばされたのではなかつたか。

四 漢詩に現れた《不遇意識》の性質

では、中島の漢詩を実際に見ていきたい。ここでは村田秀明氏により「自己の内面を詠んだ漢詩」と分類されたものを挙げてみたい。また、それらを成立順に並べてみた場合、内容の上でどのような変遷が認められるのかについても分析する（なお、漢詩の前の番号は全集収録の際に便宜上付されたものである）。まず、一九三八年（昭13）の春に成立した七言絶句、

十一 夜懷（その二）

曾嗟文章拂地空 文章地を払ひて空なるを
舊時年少志望隆 旧時は年少く 志望隆かりき

文譽未颺身疲病 文譽未だ颺らずして 身は病に疲れ
十有餘年一夢中 十有餘年は 一に夢の中

には、一九二七年（昭2）十一月、『校友会雑誌』第三一三号（第一高等学校）に習作「下田の女」を発表して以来、一九三四年（昭9）の『中央公論』原稿募集における「虎狩」選外佳作の際に吐露したものでかしさに満ちた心情、すなわち、

虎狩、又してもだめなり。但し何とか佳作と称するところに、はひつてゐる。なまじつか、そんなところに出ない方がよかつたのに。すこしいやになる。

を経てまなお、喘息の病の中で「文譽」を得られない中島の無念の心境が込められている。

次の、一九三九（昭14）年一月初めの成立とされる五言絶句や、

四

攻文二十年 文を攻むること二十年
自嗤疎世事 自ら嗤ふ 世事に疎きを
夜偶倦繙書 夜偶たま 書を繙くに倦み
起仰天狼織 起ちて仰げば 天狼織んなり

また、成立年は特定できないが、同じく星を詠んだ五言絶句、

五

北辰何太廻　北辰ほくけん何ぞ太はなはだしく廻めぐらん
人事固堪囓　人事じんじ固より囓かふに堪たふ
莫嘆無知己　莫も嘆たん無知己ち
瞻星欲自怡　星みを瞻みて　自みづから怡たのまんと欲ほす

さらに、同じく七言絶句、

八

平生懶拙瞻星悅　平生へいせいの懶拙むだせつ　星みを瞻みて悦よろこび
半夜仰霄忘俗說　半夜はんや霄せうを仰あがみて　俗說よくせつを忘わする
銀漢斜奔白渺茫　銀漢ぎんかん斜かために奔はしり　白渺茫はくべうまう
天狼欲汲稀明滅　天狼てんろう汲ひらんと欲ほして　稀まれに明滅めいめつす

には、明らかに共通する特徴がある。いずれにも夜空に煌めく「天狼」や「星」が詠み込まれており、「世事」「人事」「俗説」といった語と、意味の上で対照されている点である。とくに対句として修辭上も対照されているわけではないが、少なくとも中島は、自嘲しながらとはいえ、「世事」に対して背を向ける姿勢、いわば逆向きの視線を有していたことがわかる。

ここで注意を要するのは、その逆向きの視線が、「十一　夜懷

(その二)」の漢詩に表出しているような文学的不遇の経験を起点としていることである。つまり、作品が世に認められないうい「不遇意識」ゆえに、自らをとりまく社会を「俗説」の支配する環境とみなし、ついには「星」といった何ことも超越した恒久的な存在に目を向ける、という構図が見出せるといえよう。

五　詩境の変化と「不遇意識」の増大

このように、自らをとりまく社会を「俗」なものとしてとらえ、新たに望ましい境地や志を求めようとする構図は、「山月記」の李徴においても同じだった。李徴は「俗悪な大官」の前に膝を屈するのを潔しとせず、「人と交を絶つて、ひたすら詩作に耽つた」が、その目的は「詩家としての名を死後百年に遺」したいというものであった(傍点・引用者)。この「山月記」において李徴をとらえた不遇のありようは、大きく三点に分類できるだろう。それは、第一に「賤吏」に補せられたことによる地位的なもの、第二に「詩家としての名」が容易に揚げられないという文学上のもの、そして第三に「虎」に姿を変じたために味わった運命的なものである。とくに第二の文学的な失望感、中島本人の漢詩に現れた「不遇意識」と酷似している。ここから、李徴という人物に込められた中島の深い共感の一つに、いまだ「文誉」が得られない苦境のうちに煩悶する(生)のあり方そのものがあつたことが指摘できる。

また、中島の文学的な落胆の思いは時を経るにしたがつてますます募っていく傾向にあったことがわかる。次の一九三九年（昭和十四）五月五日の誕生日に成立した五言律詩、

二十

五月五日自晒戲作

行年三十一 行年三十一

狂生迎誕辰 狂生誕辰を迎ふ

木強嗤世事 木強にして 世事を嗤ひ

狷介不交人 狷介にして 人と交らず

種花窮措大 花を種うる 窮措大

書蠹病瘦身 書の蠹たる 病瘦身

不識天公意 識らず 天公の意

何時免赤貧 何れの時か 赤貧を免るる

には、先の伯父・斗南の漢詩表現をふまえて、自らの性情を晒し、ついに「天公」という造物主にまで疑いのまなざしを向け、運命的な失意を表現せざるを得なかった中島の〈不遇意識〉の極みを垣間見ることができるのである。

ここまで、実際に漢詩を挙げながら論じてきたが、中島の漢詩に現れた〈不遇意識〉は、大きく三つの要素から成っていることが指摘できる。第一に自己の文学が世に認められないという文学的なもの、第二に喘息の病による健康上のもの、第三にそうした

失意の（生）を総括的にとらえたことによる運命的なものである。中島はその漢詩において、とくに周囲を「俗説」の支配する空間として厳しく退ける一方で、逆にその周囲から「文誉」を得たいと願う矛盾の中に自己の内面を発見するのであり、発露した〈不遇意識〉を抑えようもなく肥大化させていくのである。そして、漢詩にみえるこうした〈不遇意識〉の構造が、後の「山月記」の李徴の形象に際して直接活かされていることは注目すべきだろう。

最後に、中島の漢詩の意義について触れておく。すでに小室善弘氏により「この人にとって漢詩は作品として公けの読者の目にさらされるものとしてでなく、自己一身の内的憂悶の表白、憂悶をしずめる安全弁としてのの意味があった」との指摘がなされ、また、村田秀明氏は、中島と同様に中国古典に通じていた芥川龍之介の漢詩を「作家生活の慰めの具であり、社交の具であり、遊戲の具である」とした上で、「中島にとって漢詩は真剣の作である。（中略）単なる遊び、慰めの具などではなく、雌伏期の思うにまかせぬ自己の内面の煩悶を吐露するにあさわしい具であった」と位置づけており、両氏の見解に首肯するものである。村田氏はさらに、とくに自己の内面を詠んだ漢詩について、「何かで紛らわせてしまかしてしまうこともなく、ひたすら苦しい内面の煩悶、焦燥感を表出しながらも、自分の可能性を信じ将来雄飛の時節を耐忍して待ちつづけようとする思い、姿勢を見ることができ」と後の文学的開花をふまえて積極的に評価している。

これらの先行研究につけ加えるならば、中島にとって漢詩とは、これまでに述べた〈家学〉の衰頹という明治の近代化の裏面において、旧時代を引きずったまま生きざるを得なかった漢学者の末裔であるところの自己の宿命のありようを、現下の文学的な不遇の経験と重ね合わせながら人知れず確認する表現手段の一つだったということである。自己の内面を詠んだ漢詩には、それだけに重い〈家学〉の歴史性と切実な文壇登場前の中島の〈不遇意識〉の諸相が刻み込まれているのである。

おわりに

中島は「山月記」で「詩家としての名」が容易に揚がらないという失意に苛まれる中で、ついに虎に変身してしまう李徴という男の姿を描いた。また中島の残したわずかな漢詩から、中島がいかに社会と関わっていたかを見た場合、中島自身も「山月記」の李徴と同じように〈不遇意識〉を募らせていたことは、興味深い事実である。

中島の漢詩からは、中島の社会との独特の関わり方や距離感、そして、作家として文壇登場を果たすまでに〈不遇意識〉とどのように向き合ってきたのかはつきりと読みとれる。中島にとって漢詩とは、「山月記」が世に出るまでの〈不遇意識〉を表現するのにあふましい形式の一つであったと同時に、伯父・斗南の漢詩との関わりにおいて、近代化の中で衰頹していく〈家学〉との

つながりを自己に直接的に確認させる手段でもあったと意義づけることが可能である。いわば、漢詩というかたちにおいて〈家学〉の歴史性や自らの〈不遇意識〉の諸相を見出していくのである。

中国古典の豊かな素養に根ざした中島文学をより深く理解するために、中島にとっての「世事」「人事」の意味するところ、また、漢詩という形式を通して表現せざるを得なかった〈不遇意識〉のその後の展開のありようについて、さらに詳しく明らかにすることを今後の課題としたい。

註

- (1) 初出は、筑摩書房版第一次『中島敦全集』第三卷（筑摩書房、一九四九・六）である。
- (2) 註(1)に同じ。
- (3) 国民文庫刊行会編『国訳漢文大成』（文学部第十二巻晋唐小説）（国民文庫刊行会、一九二〇・一二）所収のものが「山月記」の典拠とされる。
- (4) 訓読は、前野直彬編『唐詩鑑賞辞典』（東京堂出版、一九七〇・九）所収のものに拠った。
- (5) 佐々木充「中島敦の出自について」（『方位』第二号、一九八一・四）、村山吉廣「中島撫山」（『評伝・中島敦一家学からの視点』所収、中央公論新社、二〇〇二・九）に詳しい。

付記

本文、書簡の引用は、すべて筑摩書房版第三次『中島敦全集』全三巻および別巻（筑摩書房、二〇〇一・一〇～二〇〇二・五）に拠った。その際、原則として旧字は新字に改め、ルビ等は適宜省略した。

なお、本稿は「記念中日邦交正常化三十周年“中日古代詩歌交流会”（二〇〇二年十二月十九日、主催・浙江師範大学人文学院、於・浙江師範大学）における講演「中島敦の漢詩」を基に加筆したものである。当日、通訳を下さった陳愛国先生（浙江師範大学外国語学院）をはじめ、会場で教示頂いた方々に心より御礼を申し上げる。

（はしもと・まさし 本学非常勤講師）

- (6) 村山吉廣「中島撫山の『靈魂教舎』」（『新しい漢文教育』創刊号、一九八五・一〇）
- (7) 訓読は、村山吉廣「中島撫山小伝」（『中島撫山小伝』〈鷺宮町教育委員会調査報告書第二集〉鷺宮町教育委員会、一九八三・三）所載のものに拠った。
- (8) 村田秀明「中島敦の漢詩の成立」（『国語国文学研究』第十七号、一九八二・三）
- (9) 郡司勝義「解題」（筑摩書房版第二次『中島敦全集』第二巻所収、筑摩書房、一九七六・五）
- (10) 氷上英廣「解説」（現代教養文庫『中島敦選集』第三巻「幸福」所収、社会思想研究会出版部、一九五三・四）
- (11) 村田秀明「中島敦と芥川龍之介の漢詩」（田鍋幸信編著『中島敦・光と影』所収、新有堂、一九八九・三）
- (12) 以下、訓読は村田秀明「中島敦の漢詩研究」（『方位』第二号、一九八一・四）所載のものに拠った。
- (13) 氷上英廣宛葉書（一九三四年七月十七日付）
- (14) 川村湊「天狼没す」（『狼疾正伝——中島敦の文学と生涯』所収、河出書房新社、二〇〇九・六）にも指摘がなされている。
- (15) 小室善弘「中島敦漢詩研究」（埼玉県立浦和西高等学校『研究集録』第九集、一九七八・三）
- (16) 註（11）に同じ。
- (17) 註（11）に同じ。